

此処彼処

ここ

かしこ

特定非営利活動法人

ふくしま支援・人と文化ネットワーク／広報誌



Vol. 20

2021年3月

目次

巻頭／再びの地震に思うこと	1
10年目を迎えての現実	2,3
詩 潮見台	3
コロナ禍の只中で「まな板の鯉」	4
10年の思い	5
information / つぶやき	6

〒245-0013 横浜市泉区中田東3-16-5 <http://www.support-fukushima.net> Email:p-c-netw311@nifty.com

再びの地震に思うこと

NPO法人ふくしま支援・人と文化ネットワーク

理事長 神田香織

東日本大震災、福島原発事故から10年目の3・11を目前にして、2月13日の深夜、福島沖震源の地震が発生したのは周知の通りです。福島県の中通りと浜通り、宮城県南部で震度6強を観測。大津波、そして原発事故に見舞われた10年前の記憶がよみがえり恐怖に震えた方も多かったことでしょう。いわき市の私の実家周辺は震度5。居間の壁が剥がれた程度で済みましたが、震度6強の相馬市では土砂が崩れ常磐自動車道を塞ぎ、新幹線も止まりました。

3日後の発表では浜通り中通り中心に負傷者83人1400棟に被害があり今後増える見込みとのこと、

犠牲者がいなかったのが唯一の救いです。この地震は10年前の余震で少なくとも30年続くと気象庁が発表、この日本のどこに「核のゴミ」の、そして「10万年の安全管理」と言う場所があるのでしょうか。女川原発はじめ、改めて「全ての原発を廃炉に！」と今回の地震は警告しています。今年こそ脱原発に舵を切ってほしいと切に願います。

さて、コロナ禍で帰省すらはばかられる事態となってもう一年が経ちました。

正月の里帰りも叶わぬなら、暮れに母の顔をみに実家に行ったその足で、双葉町に出来た巨大な「伝承館」を訪ねました。来場者は4人。映像



伝承館

技術は優れています。展示が物足りないのと東電や政府の責任、謝罪は残念ながら見当たりませんでした。しかし希望がないわけではありません。

2月19日千葉県に移住した皆さんによる原発避難集団訴訟、東京高裁が国の責任を認めました。国民の声を司法を支えます。原発震災は終わっていないどころか、汚染水の海洋投棄など問題が山積みです。私たちは同じ思いの皆様とともに諦めずに声を上げ行動し、これからも首都圏と福島を繋ぐ活動を続けて参ります。今後とも私たちと共に福島に寄り添っていただけたら幸いです。

10年目を迎えての現実

～甲状腺がん 252 人の陰ですすむ検査見直し～

甲状腺がん支援グループ あじさいの会

事務局長 千葉親子

■検査でわかった小児甲状腺がん、有意の発生率

東日本大震災・福島第一原子力発電所の事故から10年目の今年、被災地区復興の明るいニュースに、時間の経過と地域住民はじめ関係機関のご努力があつたことと思いません。

しかし、一方で、いまだに約4万人もの方々が故郷に帰れない状況にあり、このまま原発事故は終わったことになれるのではないか、小児甲状腺がん問題は、このまま闇に葬られ、置去りにされるのではないかと不安を覚えます。

福島県では、原発事故後放射線被曝への不安を踏まえ、2011年10月から「県民健康調査」が実施され、とりわけ被ばく影響を受けやすい子どもたちに対しては、甲状腺検査が行われてきました。

事故当時18歳以下だった福島県民38万人を対象に甲状腺エコー検査を実施。20歳まで

もが、がんになっても集計外になるなど、実際のがん患者は掌握仕切れていないのが現状です。

■「過剰診断」ではない。県民も継続を要望

現在、この甲状腺検査めぐり、検査のデメリットが強調され、学校での集団検診を見直す動きが高まっています。しかし、事故当時の被ばく線量は今なお不透明であり、健康影響が起きないと断言することはできません。

甲状腺がんと被ばくとの因果関係を突き止めるためにも、検査方法の変更はあつてはなりません。

学校検診を見直す理由として、一部の専門家は、200人以上もの甲状腺がんが見つかっていることについて、手術の必要のないがんを見つけているとする「過剰診断」が起きていると指摘し

ています。しかし、多数の子どもは甲状腺がんを執刀している鈴木眞一福島県立医科大学教授は、学会で定められた「診断ガイドラインに従い適切に手術をしている。しななくてもいい症例はなかった」と反論し、多くの症例でリンパ節転移や皮膜外浸潤が起きていると「過剰診断」を強く否定しています。

実際、患者・家族は、「学校検査があつたからがんを見つけていたのだ」「私のがんは1年間で1cmも腫瘍が大きくなっていった」「手術しなければ、反回神経（声帯の動きを司る重要な神経）麻痺の恐れがあつた」など、早期発見・早期治療の大切さを訴えています。患者の中には、手術が半年遅れたことで、再発に至った患者もおり、県民にとって受診しやすい学校検診の場をなくすことは許されません。実際、多くの住民が、学校での集団検診の継続を望み、県に要望書も提出しています。

また「県民健康調査」検討委員会の県外の委員の中には、検査の強制性を問題視する委員もいますが、これについても、すでに任意検査となつて



おり、検査を受けたい県民の思いを置去りにした議論となっています。むしろ、子どもや家庭の事情で、検査を受けたくても受けられないことが生じることこそ、問題ではないでしょうか。

さらに、学校の負担が大きいの指摘もありますが、検査の負担を理由に、学校での検診を止めたいと考えている学校関係者はいません。学校の負担を考えるのであれば、人間的な手当てをするなど、検査継続を前提に合理的な支援策を検討すべきです。検査でこれ以上がん患者を見つけない、原発事故との因果関係は無いといい続けたいのか、子どもたちを守るといふ視点が欠けていると思います。

■ 過ちを繰り返さず、子どもたちの健康を見守る

先に述べた、1月15日の検討委員会で、事故当時0歳と2歳の女児が甲状腺がんと診断されたことが分かりました。この患者も学校検診がきっかけで、がんが見つかったと考えられます。甲状腺がんは、軽微ながんで、がんに気付か

ずに、生涯を終えるのが一般的、などといわれる方もいますが、そんなことはありません。すでに、再発や肺転移をしている子どももあり、子どもたちにとって、いかに重要な検査であるか再認識すべきです。

原発事故からまだ10年です。原発災害非常事態宣言も解除されておりません。10年目をひと区切りに甲状腺がん検査を止めたい関係者や専門家もいますが、学校での集団検診がなくれば、受診率は大幅に減り、甲状腺がんの状況を継続的に把握することは困難になります。

福島県では、事故発生時、SPEEDデータを公開せず、安定ヨウ素剤を配布せず、甲状腺の詳細な線量を計測しませんでした。学校における集団での甲状腺検査を見直すことは、再び、これらの過ちを繰り返すことにほかなりません。

子どもたちの健康の見守りと、甲状腺の状況を把握し続けるために、学校での集団検診が継続することを私たちは求めています。

潮見台 薄井 清美

高台にある三崎公園
海に突き出た潮見台に立つ

遠くに工業地帯

右には釣りの岩場

左には漁港が見える

眼下に広がる海原

潮見台は能舞台

うなるような風つぶて

尖った波の先端が次々と向かってくる

海は空との境までコバルトブルーの絵の具を流す

白い雲か形を変えながら海に挑みかかる

鮮やかな一枚の絵

あのとき

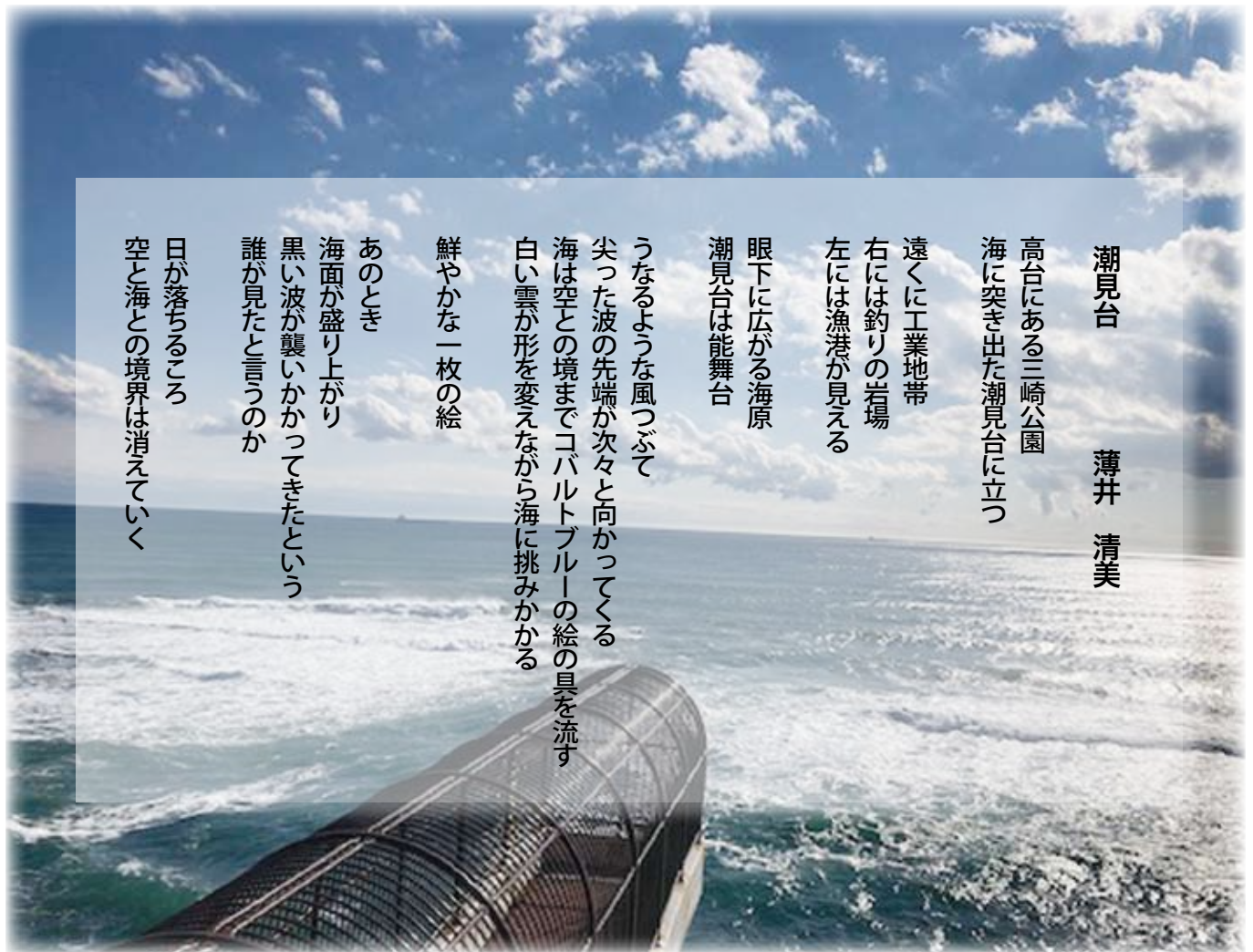
海面が盛り上がり

黒い波が襲いかかってきたという

誰が見たと言いつのか

日が落ちるころ

空と海との境界は消えていく



コロナ禍の只中で

「まな板の鯉」

役員 服部 晃一

めどが立っていません。

日本に
文化・芸術は社会に
不可欠との認識を



政府の方針が不要不急の外出自粛

で3蜜の対象にされたイベント業界。演劇界は昨年春の緊急事態宣言が発出前の3月から、公演の自粛で感染予防対策が強いられました。

金設立を目指して異例の連携をしました。一方で日本芸術文化振興会は民間から寄付を募る「文化芸術復興創造基金」を創設しました。

金設立を目指して異例の連携をしました。一方で日本芸術文化振興会は民間から寄付を募る「文化芸術復興創造基金」を創設しました。

社会に於ける文化芸術の役割

緊急事態舞台芸術 ネットワーク設立

主催者は会場の換気や消毒、密集を避ける対策に重い負担（費用等）がかかります。コロナ禍でリスクを受けた芸術団体を支えるために「緊急事態舞台芸術ネットワーク」が設立されました。また、演劇、映画、音楽の3分野が基

主催者は会場の換気や消毒、密集を避ける対策に重い負担（費用等）がかかります。コロナ禍でリスクを受けた芸術団体を支えるために「緊急事態舞台芸術ネットワーク」が設立されました。また、演劇、映画、音楽の3分野が基

欧州では文化・芸術は人々が生きていく（社会）ために必要不可欠である理念が共有されています。文化・芸術への支援が充実しているイギリス、ロシアなどは芸術家を認定する制度があります。1月現在、ニューヨークのブロードウェイやロンドンのウエストエンド劇場街でも昨年の3月から閉鎖が続いています。出演者や観客の社会的距離を保つのが難しい劇場は再開の

日本は芸術の公共性が意識されていないので芸術を維持・支援する概念がありません。零細企業が多く、フリーランスなど支援の対象になりにくい人ほど大きな打撃を受けています。演劇界でも音楽ライブなどと同様に稽古や本番などをオンラインで配信が一気に広がっています。一方で舞台芸術の根幹が揺らぐ懸念もあります。著作権（戯曲、楽曲等々）の問題などで配信に向かない舞台もあります。試行錯誤の模索で新しい興行形態や演出が生まれるでしょう。

身ともに満足感が味わえるような、他国と同様な成熟した社会でありたいです。

文化・芸術は
社会のビタミン剤

毎年、国連は「世界の幸福度」を公表しています。合理的経営で経済成長という価値を重視してきた日本。国内総生産（GDP）など指数の公報と同様に「幸福度リーダー」を政策、制度を公表すべきです。精神面で心の豊かさを目指す時代へ、幸せを中心とした心の社会へ転換すべきです。文化・芸術は社会のビタミン剤です。等々、毎日の巣ごもり生活でつづやきが増殖中です。

10年の思い

福島への支援に参加して

役員 小林 一



リフレッシュ保養

30年来の芸人仲間の神田香織さんから声がかかり、ふくしま支援・人と文化ネットワークに当初から理事として参加することとなった。湘南生まれの私が東北の湘南・いわきでニュータウン開発のために1991年から3年間働き暮らした地域の一大事、喜んで引き受けた。

最初の仕事は、思い切った外遊びもできず心身ともにストレスが溜まっている親子を湘南の海と空ときれいな空気のなかで、リフレッシュしていただこうという事業、一番印象的だったのがお母さんが何より解放された感じで喜んでくれ、それを見て子どもたちがホッとした笑顔を見せてくれた

ことである。そのうち二家族は、今もFACE BOOK等で元気な姿を伝えていただいている。サーファーの一人は湘南が気に入って、今は福島から移住し波もよい仙台に住んで、いわきの豊間界隈までやってきてサーフィンに興じている。地引網では、浜通り出身の漁師さんもいて、漁師ご飯を分けていただいたものもありがたかった。

チエルノブイリ視察

そんな中、やはりチエルノブイリが本場にどうなっているのかが気になり、百聞は一見に如かず、現地視察ミッションに参加した。25年以上たった今も、汚染は残り、原発は石棺に封じ込められたままというのは、別に報告されたとおりだが、訪問した幼稚園の園児たちが踊りや歌で歓迎してくれたのを見て、なんとなく覇気がないのが大変気になった。当時子どもだった被災者の子どもたちの可能性が高いが、医師の話をきいても甲状腺異常のせいaka免疫力が弱いようである。当地では黒海等への保養休暇が試みら

れているが、環境のよいところでのリフレッシュや笑って免疫力を高めることの重要性を改めて感じた。

ふくしまツアー

主として東京の会員たちを対象に現況を知っていたかどうかというふくしまツアーでは、学生時代の先輩の縁で当初から参加したふくしま再生の会が支援する飯館村での地域再生の試みや、旧知の奥会津（こちらも放射能汚染の影響を受けている）の大和川酒造の佐藤彌右衛門社長や奥会津書房を主宰する遠藤由美子さんたちによる電力会社の設立などをはじめとする自然共生のふるさとづくりへの取り組みを視察した。この仕組みを飯館でも導入し電力会社を起業

飯館産米を使った酒造りにも挑戦、会津・中通り・浜通りの自然共生の地域連携が成り立っているのは素晴らしいと思った。

心のリフレッシュ

最近では心のリフレッシュ事業ということで、福島高

専OGの若狭さちさんの民謡ユニット・ネオバラッドには、いわきの幼稚園や知的ハンディを持つ方々の施設でパフォーマンスをしていた。民謡と三味線という今では珍しいジャンルだが、早いリズムで今風のノリのよいユニークなもの、老若男女を問わず喜んでいただいたように（私自身不参加）会の本来の主旨の文化の力を改めて感じた。若狭さちさんの芸の力はもちろんだが、地元のためにひと肌脱ぐというおんな気に改めて感謝している。

他にも、昔からピールで活躍し、災後は産業再生のためオーガニックコットン事業を展開している吉田恵美子さんや、会に持ち込まれたイタリア人の現地調査で小学校につないでくださった、当時磐女の先生だった昔の飲み仲間の志賀由直さんはじめ、今も地域でしっかり根付いて活躍している方々を見るのは感慨深い。地域の底力に感銘をうけている、というか、こちらが元気をいただいている。今後の活動の持続的展開をお祈りするばかりである。

定期総会のお知らせ

昨年はコロナ禍のために、総会は書面決議としました。今年は、会員の皆さまと一緒に総会を迎えたいと思います。

以下に予定していますが、またコロナの感染拡大となりましたら、書面決議と致しますことを、ご理解ください。

●**総会日程**：2021年5月9日（日）
13～15時

●**場所**：本郷文化フォーラム
（文京区本郷3-29-10）
飯島ビル1階小川町企画内）
TEL：03-3818-6671



会費・寄付金振り込みのお願い

◆会費・寄付金の振り込み

<振込先>

郵便振替口座

番号：00260-7-108912

名義：ふくしま支援・人と文化ネットワーク

※お手数でも、振り込み用紙の「通信欄」に会費・寄付の区別をご記入ください。

また、振込料金はご負担していただきますようお願い申し上げます。

◆2011年の東日本大震災時、東京電力福島第一原発事故により放射性ヨウ素を含む放射性物質が大量に放出され、東日本一帯を広く汚染しました。放射性ヨウ素が子どもの甲状腺がんの原因になることは、既に明らかになっていたにもかかわらず、日本政府と福島県は予防のためのヨウ素剤服用がほとんどなされませんでした。

つぶやき

◆10年が経ち、現在甲状腺の検査は縮小化され、あえて政府は健康被害の実態を見えないようにしています。原発事故直後環境放射線が非常に高くなった時期に文科省は線量測定を止めさせました。そして福島県



は子どもの甲状腺被ばく線で経済的にも困窮している家庭も少なくありません。しかし、このような現実があるにもかかわらず、福島県も政府も「放射線の影響とは考えにくい」とし、原発事故との因果関係を否定し続けています。

◆3・11から10年。昨年から新型コロナウイルスの感染拡大など人々の関心は原発の放射能被害から別のところに移っています。しかし、私たちは10年前の3・11原発事故で引き起こされたこの現実に向き合わなくてはなりません。

放射能はコロナウィルス感染と同じように、いつか自分に降りかかってくるかもしれない問題だという事をしっかりと再認識していきたいと思えます。（郡司）